

〔原著〕

母性発達課題に関する研究（第2報）

妊娠期にあるはじめて子どもをもつ女性の気持ちに影響を及ぼす要因

三澤 寿美¹⁾・片桐 千鶴²⁾・小松 良子²⁾・藤澤 洋子¹⁾

Research on Maternal Developmental Tasks (The 2nd Report)

Influential factors on the feelings of first time pregnant women

Sumi MISAWA¹⁾, Chizu KATAGIRI²⁾, Ryoko KOMATSU²⁾, Yohko FUJISAWA¹⁾

Abstract : The first report focused on maternal role behaviors of women in childbirth, especially the change of their behaviors and feelings during their first pregnancy. This paper concentrates on the factors which influence those changing feelings with reference to certain times during pregnancy, and the way in which those feelings have been changed and what influences this change.

Data were collected from eight pregnant women using semi-structured interviews longitudinally from the first trimester of pregnancy to the third trimester of pregnancy. Data analysis was carried out qualitatively.

The results of this study were as follows : During the first trimester of pregnancy, the important factors were "the positive reaction to being pregnant", and "the certainty of the pregnancy". During the second trimester of pregnancy, the important factor was awareness of "the initial fetal movement". During the second and third trimesters of pregnancy, the important factors were "becoming accustomed to the fetal movements" and "the changing body shape as the pregnancy progressed". Factors like "seeing the ultrasound pictures during regular health checkups", "visual confirmation with the ultrasound pictures and video", "seeing the actual body shape of the fetus", "words used by the husband, mother, mother-in-law and members outside the family", and "minor troubles" were influential factors at all stages of the pregnancy. It was also suggested that the same factor had different effects depending on what stage of the pregnancy it occurred.

It is considered that a new approach is needed to help those mothers in their first pregnancy by providing information as to what kind of effects these important factors have on each stage of the pregnancy.

Key Words : First time pregnant women, Maternal developmental tasks, Changing feelings, Influential factors

1) 山形県立保健医療大学看護学科
〒990-2212 山形市上柳 260
Department of Nursing, Yamagata Prefectural University
of Health Sciences
260 Kamiyanagi, Yamagata 990-2212, Japan

2) 山形県立中央病院
〒990-2292 山形市青柳 1800
Yamagata Prefectural Central Hospital
1800 Aoyagi, Yamagata 990-2292, Japan

はじめに

母親になろうとしている女性の課題のひとつに母親役割の獲得がある。母親役割の獲得は、妊娠中からはじまり¹⁾、学習により得られる複雑な社会的認識のプロセスである²⁾と考えられる。

また、Rubinは約6000名の白人女性を対象に、女性の主観的体験をもとにした母親役割獲得過程の理論を構築したが、この中で、妊娠中の母性発達課題は、妊娠出産を通じての自分自身と胎児の安全な経過を保証すること、自分自身と自分の子どもに対する社会的受け入れを確保すること、「わたし」と「あなた」のイメージとアイデンティティの構成のために血縁的な結びつきを強めること、与えることと受けることの交流行為の意味を深く追求することの4つである³⁾としている。

現在、国内における妊婦を対象とした研究では妊婦の自己概念⁴⁾、妊娠中の胎児への愛着形成⁵⁾や対児感情⁶⁾⁷⁾を研究しているものが多い。近年国内で行われている母親役割獲得過程⁸⁾⁹⁾に関する研究の多くは米国の白人女性を対象として提唱されたRubinの概念枠組みを前提にしており、わが国の女性独自の母親役割獲得過程については明らかにされていない。一方、親性や親性の発達¹⁰⁾¹¹⁾、子どもが誕生した後の母親役割への適応や人格発達¹²⁾¹³⁾に関する研究は国内でも行われ始めている。また、妊婦の母親役割獲得過程に関する研究では、個別性が重要視されるために質的帰納的研究が多いが、わが国の社会文化的な背景に根ざした理論の構築までには至っていないのが現状である。

第1報¹⁴⁾では、妊婦の気持ちの変化として、1)ポジティブ、2)ネガティブ、3)アンビバレンス、4)ポジティブの維持の4つのパターンが抽出された。また、妊婦の気持ちに影響を及ぼす要因として『妊娠反応がプラスになる』『妊娠が確定する』『妊婦健診時に超音波画像を見る』『超音波画像の写真やビデオを見る』『マイナートラブル』『胎動を初覚する』『胎動を自覚する』『妊娠経過に伴う体型の変化』『育児の場面を見る』『夫の言動』『実母の言動』『義母の言動』『家族以外の人の言動』の13の要因が抽出され、妊婦の気持ちはこれらの様々な要因の影響を受けて変化していることが明らかになった。しかし、第1報のデータ収集においては、対象者が妊娠経過時期の異なる妊婦で

あったため、横断的なデータ収集にならざるを得ず、それぞれの要因がどの時期に、どのような気持ちの変化のパターンに影響を及ぼしているのかについて明らかにするまでには至らなかった。

本稿は、妊婦の母性発達課題に関する研究の一部を報告するものであり、第1報で報告したわが国の女性の妊娠期の母親役割獲得過程における気持ち、特に妊娠期にあるはじめて子どもをもつ妊婦の気持ちの変化に焦点をあて、気持ちの変化のパターンに影響を及ぼす要因について検討することを目的とし、今後の妊婦への看護援助を考察することにした。

研究目的

妊娠期の母親役割獲得過程における気持ち、特に妊娠期にあるはじめて子どもをもつ女性の気持ちの変化に焦点をあて、気持ちの変化に影響を及ぼす要因が、どの時期に、どのような妊婦の気持ちの変化のパターンに作用しているのかについて明らかにする。

用語の操作的定義

<母親役割獲得過程>

母親としての自己を形成し、母親役割に関する知識を得たり、技術を習得することによって母親としての準備を整える過程である。妊娠期の母親役割獲得過程には自分自身と胎児の安全な経過を保証しながら、自分自身と自分の子どもが社会的に受け入れられるように他者との関係を再構築していく母性発達課題が含まれる。

研究方法

1. 対象者

A県内の総合病院1施設に妊婦健康診査のために通院しているはじめて母親になる女性で、かつ研究への同意が得られ、妊娠初期から継続して協力が得られた8人とした。

2. データ収集およびデータ分析

データは、半構造化面接法を用いたインタビューにより、対象者の気持ちに影響を及ぼす要因がどの時期に影響を及ぼすのかという時期を確定するために縦断的に、妊娠初期(初回妊婦健診時)、中期(妊娠20週頃)、後期(妊娠28週頃)、末期(妊娠34週頃)の計4回収集した。

データ収集期間は平成14年10月21日～平成15

年5月9日であった。

インタビューは、作成したインタビューガイドを用いて、妊婦健康診査終了後の時間に外来保健指導室、または妊婦の自宅で、ひとりの研究者が継続して行った。1回のインタビューに要した時間は、約20分から60分であった。初回妊婦健診後の初回のインタビューを「あなたにとって母親になるということはどんなことですか」という質問から開始し、その後は気持ちの変化に焦点をあて、「いつから、どんな気持ちになりましたか」という質問を入れながら、自由に語ってもらうこととした。

インタビュー内容は、対象者から承諾を得た上で録音し、逐語録に起こし文章化した。観察した内容はフィールドノートに記載し、分析の参考とした。

データは質的に分析し、質的研究者のスーパービジョンを受けながら、母性看護学領域の研究者が行なった。妊婦の気持ちの変化に影響を及ぼす要因と思われる箇所について、それらが妊娠期のどの時期で、どのような気持ちの変化のパターンに影響しているのかが特定できるような箇所を抽出し、抽出した箇所はその意味、解釈に基づいてラベルつけ、または概念化していった。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、対象者に研究の目的、内容、プライバシーの保護について、また、研究への参加は対象者の自由意思に基づくものとし、文書お

よび口頭で説明を行った。研究協力に関しては、以下の内容を説明した。インタビュー日時や場所は対象者の希望に添うこと、インタビュー途中での参加の中断や発言の拒否については自由であること、得られたデータは研究目的以外では使用しないこと、個人を特定されるような提示はしないこと、厳重なデータ管理を行うこと、調査への協力は病院の診療や看護と一切関係なく、研究参加の有無にかかわらず、それによる不利益がないことを保証されること、研究者の所属および連絡先についてであった。また、研究協力について承諾した対象者と研究者の間で同意書を取り交わした。さらに、毎回のインタビュー前にも、インタビュー実施の承諾を確認したうえでインタビューを行った。

施設に対する手続きとしては、妊婦健康診査のために通院している病院の病院長および看護部長あてに研究依頼書を提出し、承諾を得た。

結 果

1. 対象者の背景

対象となった女性は8人で、そのうち流産既往がある妊婦は3人であった。また、夫以外の家族と同居している妊婦が4人、初回インタビュー時に職業をもつ妊婦が4人であった。

対象者のうち、妊娠末期に切迫早産の治療目的で入院したH氏は、妊娠初期、妊娠中期、妊娠後期の合計3回のインタビューとなった（表1）。

表1 対象者の背景

対象	年齢 (歳)	既往 妊娠 分娩歴	妊娠中 の異常	職 業	夫以外の 同居者	身近にいる 子どもの有無	インタビュー実施時の妊娠週数			
							初 回	2 回目	3 回目	4 回目
A	29	1 妊 0 産	特に無し	無職 (調理師：妊娠 後に退職)	義父母	有： 友人の子ども	13 週	21 週	29 週	36 週
B	29	3 妊 0 産	切迫早産 内服治療	薬剤師 (妊娠経過中に 退職)	無	有： 妹の子ども	14 週	21 週	31 週	38 週
C	25	0 妊 0 産	切迫流産 入院治療	医療事務 (妊娠経過中に 退職)	義父母	有： 友人の子ども	12 週	23 週	29 週	35 週
D	30	0 妊 0 産	特に無し	無 職	義父母	有： 友人の子ども	12 週	20 週	28 週	37 週
E	26	0 妊 0 産	切迫早産 内服治療	会社員	無	有： 義兄・友人の子ども	13 週	20 週	28 週	35 週
F	33	1 妊 0 産	特に無し	無 職	無	有： 義弟の子ども	12 週	24 週	30 週	36 週
G	28	0 妊 0 産	切迫流産 内服治療	寮 母	無	有： 姉の子ども	1 週	22 週	32 週	36 週
H	22	0 妊 0 産	切迫早産 入院治療	無 職	義 母	有： 近所に住む子ども	12 週	20 週	32 週	実施せず

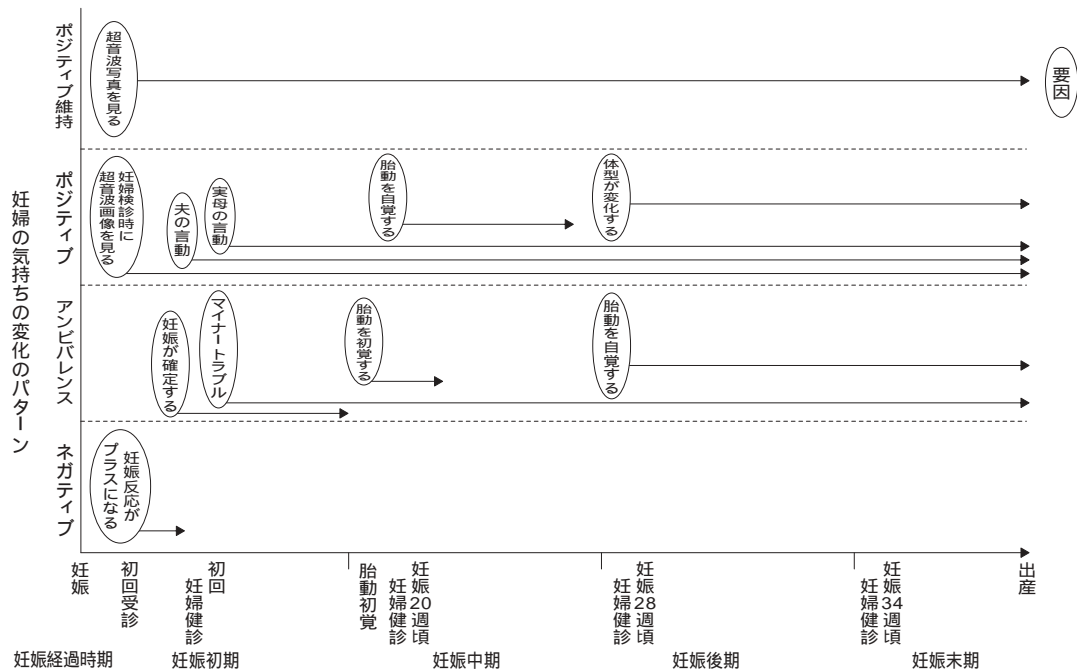


図1 妊婦の気持ちに影響を及ぼす要因と妊娠経過時期に伴う妊娠の気持ちの変化のパターン
 要因と矢印は開始の時期からの継続をあらわし、各妊娠経過時期内における要因の位置は特に意味をもたない

2. インタビューの結果

インタビューの結果について、第1報で抽出された妊婦の気持ちに影響を及ぼす13の要因がどの時期に、妊婦の気持ちの変化、すなわちポジティブ、ネガティブ、アンビバレンス、ポジティブの維持の4つのパターンにどのように影響を及ぼしているのかに焦点をあてながら、妊娠経過における時期と要因が作用する気持ちの変化のパターンについて分析結果を示す。

気持ちの変化に影響を及ぼす各要因の作用する時期については、妊娠初期では『妊娠反応がプラスになる』『妊娠が確定する』が、妊娠中期では、『胎動を初覚する』が、妊娠中期、後期、末期では『胎動を自覚する』『妊娠経過に伴う体型の変化』が、妊娠中のすべての時期を通しては『妊婦健診時に超音波画像を見る』『超音波画像の写真やビデオを見る』『育児の場面を見る』『夫の言動』『実母の言動』『義母の言動』『家族以外の人の言動』『マイナートラブル』が妊婦の気持ちの変化に影響を及ぼしていた（図1）。

また、第1報で抽出された妊婦の気持ちの変化のパターンのうち、ポジティブに作用する要因は『妊婦健診時に超音波画像を見る』『夫の言動』『実母の言動』『妊娠経過に伴う体型の変化』であり、ネガティブに作用する要因は『妊娠反応がプラス

になる』であった。アンビバレンスに作用する要因は『妊娠が確定する』『胎動を初覚する』『マイナートラブル』で、ポジティブ維持に作用する要因は『超音波画像の写真やビデオを見る』であった。時期により作用する気持ちの変化のパターンが異なる要因は『胎動を自覚する』であり、妊娠中期ではポジティブに、妊娠後期と末期ではアンビバレンスに作用していた。時期や個人のおかれている状況によりポジティブ、ネガティブに作用していたため、作用する気持ちの変化のパターンを特定するまでには至らなかった要因は『育児の場面を見る』『義母の言動』『家族以外の人の言動』であった。

以下、妊娠の時期別にどの要因がどのように作用しているかについて詳細に記述していく。

(1) 『妊娠反応がプラスになる』（妊娠初期）

妊娠反応がプラスになっても、胎児が確認できないために妊娠が確定したと診断されておらず、妊娠が確定していないという状況に対して、妊婦は不安に代表されるようなネガティブな気持ちをもっていた。

市販の検査薬を使って陽性だったので病院に来たんですけど、超音波検査をして、まだ早かったみたいで、うまく写らなかったみたいなんです。で、子宮

外妊娠のおそれもあるということで、すごく不安だったんです。【C氏】

市販の薬でプラス反応が出た時、妊娠ということはわかるんです。けれども子宮外妊娠であるとか、そういったいろんな病気の私の知らないこと、何かないかなあ、と病院で診ていただいて、それで安心して、で、今度はできたらできたで、無事生まれるかまで、やっぱり不安なことがありますよね。【D氏】

ちゃんとわかるまで（時間が）長く感じた。【E氏】
(2) 『妊娠が確定する』（妊娠初期）

胎児が超音波で確認されたことによって、妊娠継続がある程度保証され、幾分不安な気持ちは緩和されるが、うれしさに代表されるようなポジティブな気持ちと、不安に代表されるようなネガティブな気持ちを同時にもっていた。

うれしいけど不安もいっぱいある。大きくちゃんとなれるか、ちゃんと無事に生まれるか、五体満足で。早くもう（病院に）行きたくて、行きたくて。何か見たい。早く確認したい。うれしくて、わあって、妊娠したんだなあ、って。【A氏】

なんか不安で、今のところは不安でいっぱいというのが第一です。で、子どもができたのは、やっぱりうれしいんだけど、半分以上がまだ不安。で、おなかも出てないから、本当に妊娠しているのかっていうのも、ちょっと不安、なんか疑問。お医者さんには妊娠ですよ、って言われたんですけど、見えてないから自分の中では本当に妊娠しているのかなあ、って思いました。【H氏】

(3) 『超音波画像を見る（妊婦健診時に医師の説明を聞きながら見る）』（妊娠中のすべての時期）

超音波画像は、妊娠初期においては、妊娠が継続していることの確認とともに、胎児の存在を確認する唯一の手段となり、妊娠継続への肯定的感情を伴っていた。また、妊娠週数が進むと妊娠継続の確認だけでなく、胎児の成長や胎児の性別が確認できることによって、うれしい気持ちや胎児への思い、期待感をもつことにつながっていた。

(妊娠初期)

モニター見て、すごく実感して。頭とか、手とか、

足とか見えて、すごくうれしい。妊娠がわかった時より、今の方がうれしい気持ちが強いです。ちゃんと赤ちゃん育っていくかなっていう、そういう気持ちが生まれてきました。【B氏】

超音波で見てもらったりするときなんか、先生は必ず「元気ですよー」とか声をかけてくれるんで、ああ、よかったって。診てもらうまでは、やっぱり今まで心配でした。【F氏】

(妊娠中期)

超音波エコーの検査で、赤ちゃんが口をパクパクしているのか確認できて、がんばっているなと思いました。【C氏】

(妊娠後期)

（性別が）わかった頃ははっきりして、すごいまた、本当に赤ちゃんがいるんだって実感がわいたのと。

中略 元気に生まれてくれればどっちでもいいかなっていう感じで、いろんな気持ちが混ざって。【B氏】

(妊娠末期)

超音波、アレで顔とかどんどん大きくなったりとか、前は1回で見れたのが、今は断面図みたいな感じでしか見れなくなっているし、そうするとやっぱりどんどん成長しているなあ、みたいな感じで。【B氏】

(4) 『超音波画像を見る（写真やビデオに録画して見る）』（妊娠中のすべての時期）

健診後も健診でもらった超音波画像の写真の何度も見て、胎児が成長していることを確認する手段とし、うれしい気持ちを持ち続けていた。また、他者への伝達の手段としたり、コミュニケーションの手段としたりして、喜びを共有しようとしていた。他者が喜ぶ様子を見て、妊婦自身もさらにうれしさを増していた。

(妊娠初期)

写真を写しますよね。あの時に、ちっちゃいんだけど、まだ全然形には写ってないんだけど、見えた時が一番最初にうれしいと思ったときです。【H氏】

(妊娠中期)

こうまず、母に見せたら父を連れてきて見て。とりあえず連れてきて見て見て、とかって。また持っていて、また同じビデオなんですけど、それ見て、かわいいねとか。本当にそんな、普通の話は何回も同じなんですけど。 中略 うれしくって、見てほし

くって。【E氏】

(妊娠後期)

そのビデオとか(見て)。タマじゃないよとか。

【E氏】

(妊娠末期)

今回は超音波の写真をもらえなかった。先生が撮り忘れてしまったらしい。でも、ビデオにはちゃんと録画してくれているので、大きさはビデオを見て確認した。【C氏】

(5) 『マイナートラブル』(妊娠中のすべての時期)

妊娠初期では、つわりのために妊婦は身体的にはつらさを自覚しているが、つわりを妊娠継続の根拠として受けとめていた。妊娠中期以降では、マイナートラブルとしての身体的自覚症状が、胎児の健康状態を心配する原因になったり、今まで行ってきたことを中止したり、制限するなどして自分の行動を調整しようという動機になっていた。

(妊娠初期)

この間までつわりがあって気持ち悪かったんですけど、なんかそういうのがある時期って……、あげる(嘔吐のこと)から気持ちわるいのかな、なんて。なんか最近治まってきたんで、大丈夫かしらみたい。よくわからないんで、まだ。でも今日診てもらって、元気ですよって。【F氏】

(妊娠中期)

仕事とかで前回もおなか張って、前回も薬を出してもらったんですけど、やっぱり無理できないかなあ、って。【G氏】

(妊娠後期)

むくみがあるって言われると、ヤバイヤバイとか思って。中略 特に(塩分を)控えはじめたのは、むくみを言われてからです。【F氏】

(妊娠末期)

こんなところで、ここまで大きく育って、私の喉にできた(化膿性扁桃炎)ので、赤ちゃんが育たなくなったりしたらどうしようっていう感じの心配が大きかったですね。【E氏】

(6) 『胎動を初覚する』(妊娠中期)

不確かな胎動初覚から胎動を確信するまでには、胎動を確信することに注意が払われ、胎児への思いにはつながっていない。しかし、胎動を感じたことそのこと自体はうれしい気持ちや胎動の実感として受け止められていた。

ピクッ、ピクッとはするんですけど、それが本当に赤ちゃんの胎動なのか、腸がグルグル動いただけなのか、いまいちはっきりわからなくて。【B氏】

なんかあのボコボコって感じで。なんかおなかのアレなのかなってはじめは思ってたんですけど、なんかそんなにいつもボコボコなるのはおかしい……もしかしてこれかなと思って。【F氏】

便秘しているからガスが動いているのかなあ、なんかこれかなあと思っていたら、だんだんに日に日に強くなったんで、あ、やっぱりこれだと思って。いるんだあって、ちょっとだけ実感っていうか。【G氏】

はじめて動くのを感じたんですよ。その時はすごく、やっぱりうれしかった。【H氏】

(7) 『胎動を自覚する』(妊娠中期・後期・末期)

胎動を確信すると、超音波画像でのみ得られていた胎児の存在確認が、胎動の自覚により、胎児の存在や胎児の活動が日常的に確認できるようになり、安心した、母親としての自覚が高まったと気持ちを表現していた。また、胎動の変化を胎児の様子を知る手がかりとして胎児の様子を想像し、うれしさや楽しさも感じていた。

(妊娠中期)

寝ながら見てると、ボコッと、こうなったりして。おお、すごいなとかって。成長してるんだなと思って。【A氏】

母親としてがんばらなくっちゃいけないとか、いろいろ思って。今もすごく動くのがだんだん強くなってきているので、そういうのが自分の中にもう一人いるんだなって、実感できる時がその時なので、大事にしたいと思っています。【H氏】

胎動も活発になってきて。前は蹴ったりする感じだったんですけど、今はクニクニゅってねじれたりとか、ピクッピクッ、ってしたりとかいろんな動きが出てきた感じがあって元気に育っているのかなと思ってうれしい。【B氏】

ああ、ちゃんと育ってくれてるーって。それを感じることができるって安心ですね。元気に動いてるなっ

て。【D氏】

おなかの赤ちゃんが前よりずっと動くようになって、中略 おなかをなでる回数も増えてきて、一緒に生活しているのを感じて。【E氏】

（妊娠末期）

胎動もすごく力強くて、ただおなかを見ているだけでも、ボンボン動いているのがわかってうれしい。【C氏】

（前回骨盤位だったが、今回の妊婦健診で頭位になっていることを確認し）逆子の時はあんまり動かないんですよ。横にちょっと動いたかなとか、ピクッと動いたかなぐらいで。逆子が治った時は、足がおなかの袋をポンッと蹴る感じとか、手でギュッと押す感じとかがわかるので。全然違うなあ、って感じでした。【E氏】

また同時に、胎動を確信してからは、胎児が動かないことに心配になることや胎動による苦痛のため胎動を制止するような気持ちを抱いていることを次のように表現していた。

（妊娠後期）

動いていると、今日も元気に動いてるって感じで、目安ってというか、なんだろう……動かないとまた心配だし。【B氏】

（妊娠末期）

結構赤ちゃんが動いても張っちゃうし、立って何かしても張るし。あんまり動きすぎて辛くて横になったりして。あんまり動くなーとか言って。【B氏】

『胎動を自覚する』は、妊娠中期にはうれしい、楽しい、安心などのポジティブな気持ちに影響を及ぼしていたが、妊娠後期と末期には同時に心配や辛さなどのネガティブな気持ちに影響を及ぼしていた。

(8) 『妊娠経過に伴う体型の変化』（妊娠中期・後期・末期）

胎動自覚の時期におおよそ一致して下腹部の増大を自覚し、妊娠中期以降には他者からも体型変化を根拠として妊婦であることを認識されることを喜んだり、妊婦であることを実感したり、妊婦であることに對して自信や誇りを持ちはじめていた。また、乳房の変化も子育て、特に母乳育児への期待と結びついていた。

（妊娠中期）

これはうれしかったことなんですけど、買い物に行って、やっぱりおなかが目立ってくるので、何か持ちましようかとかって言ってくれる方が増えたので、すごいうれしかったです。【H氏】

（妊娠後期）

（妊娠を）言っていなかったのに他の人から気づいてもらえたから、いっつも気づいてもらえないから。たまたまその人から言われて、すごいうれしくて。妊婦さんに見てもらったっていうか、周りからも。うれしくなったっていうか。【A氏】

急におなかが大きくなってきて、だんだん妊婦さんらしい形になってきたというか、姿になってきたなあっていうのを実感しました。【B氏】

（妊娠末期）

なんか早く会いたいっていうよりは、このおなかの大きい苦しみから開放されたいみたいな。【B氏】

おっぱいに血管が立っているっていうか、血管が見えるっていうかよくわからないんですけど、そうだったってマタニティピクスの先生に言った時に、じゃ、おっぱいいっぱい出るねって言われたので、とりあえず出ないって言われるよりは少しは期待できるかなと思いました。【C氏】

周りからも大きくなったのがわかるようになったんだあって。（自分の身体に対して）誇らしげというか、妊婦だぞ、と。【C氏】

(9) 『夫の言動』（妊娠中のすべての時期）

妊娠初期から夫とのかかわりについてポジティブに語られていた。夫の言葉や行動がうれしいと表現されたのは、妊娠後期の両親学級に参加した後の夫の反応や夫の妊婦への配慮、思いやりのある行動を感じることであった。

（妊娠初期）

大事にされてるなと。もともと旦那さんが手伝ってくれる人だったんで、さらに手伝ってくれるようになった気がします。【C氏】

（夫との話は）つわりを和らげてくれるかな、ぐらいで。【E氏】

（妊娠中期）

できるだけ日曜日とか旦那さんと外に出かけるようにして。家にいるとストレスがたまったりすると悪いので。旦那さんも気を遣ってくれていると思うので。【C氏】

旦那も手でこう、動くっていうのがわかってきて。それまでは大丈夫だ何とかなるっていう感じだったんだけど、自分も胎動を感じるようになったら、具体的に話にもなってきたし、協力的もなってきたし。【G氏】

(妊娠後期)

その時はちょうど健診で、夜にはじめて赤ちゃんの名前の話に旦那さんとなって。すごいちゃんと考えてるんだなあっていうか。すごいうれしかったなあっていう感想ですね。【A氏】

(夫は)生まれてからこういうことしたいとかのシチュエーションが結構あるみたいだなあ、って思って。【D氏】

(妊娠末期)

体験のおモリ(妊婦体験ジャケットのこと)とかを着てその辺を歩いたりして、あーやっぱり大変なんだねって、大変さをわかってくれたみたいで、参加してよかったなあって思います。【A氏】

(夫が)自分から言ってくると、楽しみにしてるし、心配もしてくれてるんだな、っていう安心感があるんですけど。【E氏】

(10)『実母の言動』(妊娠中のすべての時期)

実母の言葉や行動をポジティブにとらえ、妊婦自身の気持ちをふるいたたせたり、実母の言葉どおりに自分の行動を中止したり制限するなど、自分の生活を調整していた。

(妊娠初期)

(自分がしたいことを)してない、っていうか。そうですね。親とかにもいろいろ言われてるんで。【B氏】

入院しているいろいろ考えているうちに、いろいろやっぱり本とか。あと一番大きいのは母親と話しまして、そんなに考えてても、みたいな。なるようになるから、みたいなでした。【E氏】

(妊娠中期)

言ってもらえないとわからないから、わからないっていうか、やっぱり言ってもらえるだけありがたいかなって。たまにうるさいとかって思う時もあるんですけど。【F氏】

(妊娠後期)

(母に)何かせかされるじゃないけど、そういうのがあるから、もうちょっとなんだ、もうちょっとなんだあって。【F氏】

(職場の厳しい状況について母親と話したことは)頑張れるかな、っていう自信に関係ありそうっていうか。【G氏】

(妊娠末期)

実の母っていうか……大丈夫、大丈夫って言うのは誰でもできるけど、叱るのは、それだめでしょうっていうのは、やっぱり言う人がいないとダメだなって。【A氏】

次から述べる3つの要因は、作用する気持ちの変化のパターンが特定できなかった要因である。

(11)『育児の場面を見る』(妊娠中のすべての時期)

身近に母親役割モデルが存在する場合は、妊婦自身が意識しようとしなくても妊娠初期から育児の場面を見たり聞いたりする機会がある。しかし、妊娠後期以前の時期においては自分の子どもや子育てに関する漠然とした想像はするが、自分が母親になった姿との対比は行なわれていない。しかし、妊娠末期になると、母親役割モデルを見ることが、即自分が母親になったときの姿の想像につながっていた。一方、身近に母親役割モデルが存在しておらず、妊娠初期に育児の場面を見ていない妊婦においても、妊娠後期から妊娠末期の両親学級参加や自分自身の体型の変化を自覚することがきっかけで、積極的に自分から育児中の母親役割モデルの育児場面を見たり、聞いたりする機会を得ようとしていた。また、育児の場面を見ることは、未来への期待感や希望ばかりでなく、喪失感を感じるきっかけにもなっていた。

(妊娠初期)

妹に子どもがいるんで、なんとなく子育てはこういうふうによればいいんだなってのはわかるんですけど。やっぱり自分が見てるのとやって、自分が体験するのとではまた違うんで。いろいろ聞きながら。【B氏】

おもしろい話の時あるじゃないですか。友達の子どもの話聞くと、自分の子どももいずれこうなるのかなぁとか。ああ、何歳くらいでしゃべるんだぁ、とか。ああ、もう立ってるんだねえ、とか。いずれはこうなるのかなぁ、って。【E氏】

（妊娠中期）

お手伝いしてるって感じだから。ま、雰囲気的にシミュレーションじゃないけど、こういうふうによればいいんだなっていうのは、こう見てわかりますけど。自分がね、自分の子どもをまたそうするのはまた、たぶん自分の時は違うんじゃないかなと思いますけど。【B氏】

（妊娠後期）

その頃（妊娠6か月）は本で見て、これいるのかなとか自分で頭だけで考えていて。最近になってもうそろそろ現実的になってきたから友達とかに聞いて。

中略 今（妊娠8か月）になって、友達と連絡取り合ったり、直接会ったりして。【A氏】

漠然としていたけど具体的な感じで。赤ちゃんが生まれると赤ちゃん連れの行動になるから、今までとは違う感じの生活だなと思って。それも寂しくなるって。【A氏】

（義理の兄夫婦の子どもを見たり、義姉の経験話を聞くために上京した後）なんか血はつながってないんですけど、主人の方の兄の子どもなので、つながってないんですけど。やっぱり違う感じがして。かわいいなあって感じで。いろいろ聞いたりすると、私もできるのかなぁ、なんて思ったりする部分もありましたね。【E氏】

（妊娠末期）

雑誌とか、育児についての情報とかいろいろ本とかいっぱいあるんですけど、友達とかあまの情報……、雑誌で見るよりも直接聞いてこうだよ、ああだよって聞いた方が頭にはいるなあっていう気がしましたね。友達とかとも最近会ってますけど、やっぱりそっちの方が、あーってすんなりインプットなるっていうか。【A氏】

友達の育児っていうか……子どもとの接し方を見ていると様々じゃないですか。だから、こういうふうになりたいなあって思う時もあれば、いろんな育て方があって。おとなのように叱る人もいれば、ちゃんと

子どもとしてっていう……叱り方とか接し方とか、そういうのを見ていると自分もこういうふうにしてあげたいなって考えます。【G氏】

(12) 『義母の言動』（妊娠中のすべての時期）

義母との同居の有無に関わらず、妊婦はそのときそのときの義母の言葉や行動に対応し、感謝したり、不快になったり、期待に応えようとしたり、かつ気を遣いながら生活していた。

（妊娠初期）

同居しているんで、お姑さんとかいるじゃないですか。なんかあんまり休みたいくても休めないっていう感じ。【A氏】

（妊娠中期）

その前までは口だけでは言うには言ってたんですけど、なんか最近になってこう、行動で出てきて、カルシウムはとらんねーって。【A氏】

いろいろ言いたくはいるんでしょうけど、やっぱりちょっと遠慮してるみたいですよ。あんまりなんだかんだ口うるさく言われたら嫌だろうなって、なんか思ってくれてるみたいなんです。私は別にいいんですけど。食事とかですかね、気持ち悪くても何でもいから食べると。あんまり重いもの持つとか、冷やすとか、その程度のことでですけど、それは言われたり。【D氏】

（妊娠後期）

心配して言ってくれるのはわかってるんですけど、やっぱり鬱陶しいなあって。【A氏】

（妊娠末期）

嫁ぎ先のお母さんは、相変わらずこう、でーんと構えて、大丈夫、大丈夫みたいな感じで。でも、この前むくんで体重も増えたりして、塩分制限されたんですよ。そういうときにはあんまり大丈夫、大丈夫って言われるのも辛いなっていうか。【A氏】

旦那さんの実家の方では見ていないし、顔を見ていないし、電話でも声しかわからないし、だから余計に心配してくれているのかな、って思うんですけど。ちょっとプレッシャー。旦那さんの方は初孫なんですよ。だから余計なのかもしれない。【B氏】

着々と準備もしてくれていますし、せっかくそんなふうに思ってもらって、その期待に応えたいって。【D氏】

(13) 『家族以外の人の言動』(妊娠中のすべての時期)

家族以外の方は職場の上司, 同僚や友人, 医療従事者であり, 妊婦は多様な人間関係のなかで, これらの人から情報を得て, 自分が納得できる方法を選択したうえで快適な生活を送ろうとしていた。また, 家族以外の人に妊婦であることを認められることによって, うれしいと感じていた。一方, 妊婦に理解のない職場で働く人は, 上司の言葉により不快感を強くしていた。

(妊娠初期)

一緒に働いている人だとか, あとは家族とか, 母親とか, あと妹とか。いろいろこういうふうにしらない方がいいよーとか。あと, カフェインとかあんまりコーヒーとかお茶とか, なんか控えておきなーとか。【B氏】

ありがたいですねー。自分は今まで経験もしてなくて, ただ, おめでとーなんて言ってたんですけど。ああ, 喜んでもらえるとなつぱりうれしいものだなあって, しみじみ思いました。【D氏】

(妊娠中期)

一番上に立っている人が全然, こう, 理解してくれなかった。その分では仕事が一番きつかったかな。仕事のきつくないんですけど, そのいろいろもめ事がきつかったかなと。【E氏】

(職場である老人介護施設の入居者の) ちょっとした反応でもうれしいんですよ。そういう反応を示さない人が反応を示すって。それがこう自分の赤ちゃん, 子どもを見て反応を示してくれたのがうれしくなるし。【G氏】

(妊娠後期)

近所の人からチャイルドシートを貰ったんですよ, 自分の娘さんのやつを使わなくなったからって言って。みんながこう, 待ってるっていうか, みんないろいろ期待してるんだなあ, とかって思ってきた。自分だけじゃないんだなあって思って。本当に近所の人とか周りまで待ってくれるんだなあと思ってうれしくなりましたね。【A氏】

私がたまたまいた部署の直属の上司は, ちょうど自分の娘も同じような職場で育児休暇をもらってっていうので, そういうのを見てきたので, 言った方がいい

いよ, 何言われても言った方がいいよって応援してくれたので頑張りました。【G氏】

(妊娠末期)

水分さえとっていれば, そんなに何週間も食べていないわけじゃないから大丈夫ですよ, って。だから, 点滴打ってもらってるから, そんなに無理して食べたり飲んだりしなくても大丈夫ってことで。【E氏】

考 察

母親役割獲得過程は, 母親としての自己を形成し, 母親役割に関する知識を得たり, 技術を習得することによって母親としての準備を整える過程であるが, 特に妊娠期は, 胎児の存在を認識することによって自分と胎児との関係を構築し, さらに自分と他者との関係を再構築する初期段階の準備期間として重要な時期であると考えられる。したがって, この準備期間に妊婦自身が母親としての自己をどのように考え, 気持ちを变化させていくかについて把握することは, 母親役割獲得過程を円滑に進行させるための援助を考える上で重要である。

妊婦の気持ちに影響を及ぼす13の要因がどの時期に, 妊婦の気持ちの変化のパターンに影響を及ぼしているのかに焦点をあて, 妊娠経過における時期と要因の作用する気持ちの変化のパターンについて分析した結果に基づき, 妊婦への看護援助を考察する。

『妊娠反応がプラスになる』のように, 市販の妊娠反応検査薬の普及により, 受診前の早期の時点で妊娠を知っている場合が多い現在の状況では, 妊娠が確定するまでに期間を要するようになっていく。したがって, 妊娠に確信のもてない不安定さから妊婦の気持ちがネガティブになることが予想できるため, 妊婦の初診時の思いや妊婦が受診の結果をどのように受けとめているかを把握しながら, 妊娠確定までの受診期間に対応することが看護職者に求められている。さらに妊娠が確定したあとも妊娠継続に確信をもてない不安定さにより, 『妊娠が確定する』がアンビバレンスに作用していることから, 妊婦自身が妊婦健診時以外でも妊娠継続を確信することができるようになる胎動を自覚する時期まで継続して気持ちを把握しながら対応することが必要である。

また, 同様に不確かさからアンビバレンスに作

用する『胎動を初覚する』についても、胎動の不確かさが確かさへ円滑に進むように、妊娠初期から妊娠中期にかけて、胎動に関する具体的な情報を提供することが看護職者としての重要な役割と考えられる。

妊娠中のすべての時期で『妊婦健診時に超音波画像を見る』はポジティブに、『超音波画像の写真やビデオを見る』はポジティブ維持に作用していた。近年の産科医療において、超音波画像診断は胎児の健康度を診断するために欠かせない手段になっているが、妊婦が超音波画像をどのように受け止め、活用しているかについて明らかにしている研究は少ない。しかし、超音波画像診断が普及している現代においては、医療従事者は超音波診断の結果を伝達するだけでなく、超音波画像を見た時の妊婦の胎児に対する気持ちや思いを引き出すことを考慮し、また、妊婦が胎児の存在を他者に伝達するための手段としての活用も考えながらアプローチすることが必要であると考えられる。

『胎動を自覚する』は、妊娠中期ではポジティブに、妊娠後期、末期ではアンビバレンスに作用していた。初覚胎動を知覚することは、妊婦に必ずしも喜びや幸せのみをもたらすのではない¹⁵⁾ことを考慮し、胎動を確信したあとも妊娠経過の過程で、胎動や胎児に対してどのような思いを抱いているかを話せるようなきめ細かい援助が必要である。

『妊娠経過に伴う体型の変化』はポジティブに、『マイナートラブル』はアンビバレンスに作用していた。安全な妊婦としての生活を保障し、より健康な状態で妊娠が継続するためには、妊婦自身が妊娠経過に伴う身体的な変化やマイナートラブルを理解し、妊婦であることを自覚することが重要である。さらに妊婦としての自覚は健康管理行動の動機となり、正常な妊娠経過を維持するための健康管理コントロールが可能となると考えられる。したがって、看護職者は妊婦が身体的な変化やマイナートラブルを理解することを助け、妊婦が自ら健康管理コントロールに向けた行動選択が行なえるように援助していくことが重要である。また、看護職者が、妊婦の自覚している具体的な制約や負担感、戸惑いを理解していることや制約や負担感に共感し受け止めることができることを妊婦に示すことは、妊婦自身が自分は特別ではないとい

うことを認識する¹⁹⁾ことにつながる。そして妊婦が自分自身を肯定的に受け止められるようになることで、健康管理も自分自身の課題として主体的に捉えられるようになって考えられる。

『育児の場面を見る』は妊娠経過時期やそれぞれの妊婦のおかれている状況により作用する気持ちの変化のパターンが多様であった。この要因は人的な環境要因と関係が深いため、妊婦と育児の場面を提供してくれる人との関係を理解すると同時に、妊婦が役割モデルを選択する過程においては、規範的なモデルにとらわれず価値観の多様性を保証⁹⁾しながら、育児の場面を見たか見ないかではなく、示された育児の場면을妊婦がどのように自分自身の中に取り込んでいるかを把握し援助する必要がある。

人的環境要因である『夫の言動』『実母の言動』は妊娠中のどの時期でもポジティブに作用していた。妊婦にとって、妊娠中の心配事全般に対する対処行動において夫からの支援は重要な条件であり¹⁶⁾、実母との同居・別居にかかわらず、母親としての役割を遂行するようになる最初の段階では、実母を頼りにし、実母の援助を期待していると考えられる¹⁷⁾ことから、妊娠期の母性発達課題達成のための支援者として夫や実母の役割は重要であると考えられる。また、『義母の言動』『家族以外の人の言動』は、義母との同居、職場での人間関係等の個人のおかれている状況などによりポジティブ、ネガティブに作用していた。拡大家族では手段的サポートは充足されており、妊婦の希望するサポートは情緒的サポートである¹⁸⁾ことから、看護職者には、義母との同居により得られる実際の手段的サポートとサポートによる妊婦への情緒的な影響を同時に把握し、妊婦とこれらの人的環境との相互関係を個別的にみながら援助する姿勢が求められる。

『育児の場面を見る』『義母の言動』『家族以外の人の言動』の3要因については時期や気持ちの変化のパターンが多様であり、今回の研究では特定するに至らなかった。これらの要因は個別性が強いことから、個々のおかれている状況や人的環境のありようなどによって気持ちの変化のパターンに対する作用が異なることを考慮しながら援助していくことが必要と考えられる。

おわりに

今回, 第1報に引き続き質的帰納的アプローチにより, はじめて子どもをもつ妊婦8人に対して, 妊娠初期, 中期, 後期, 末期に半構造化面接法を用いて縦断的にインタビューを行った。インタビューで得られたデータを第1報で抽出した妊婦の気持ちに影響を及ぼす13の要因と, その要因が作用する4つの妊婦の気持ちの変化のパターンに基づいて, どの要因が, どの時期に, どのように作用しているかを特定するため質的帰納的に分析した。その結果, 『妊娠反応がプラスになる』『妊娠が確定する』『妊婦健診時に超音波画像を見る』『超音波画像の写真やビデオを見る』『マイナートラブル』『胎動を初覚する』『胎動を自覚する』『妊娠経過に伴う体型の変化』『夫の言動』『実母の言動』の10要因については要因が作用する時期と作用する気持ちの変化のパターンを特定できたが, 他の3要因については個別性が強く, 個々のおかれている状況や人的環境のありようなどによって時期や気持ちの変化のパターンが多様であり, 今回の研究では特定するに至らなかった。今後, さらに妊婦の主観的な体験をデータとして収集し, その分析を通してわが国の社会文化的背景に根づいた母親役割獲得過程に関する概念を抽出し, ひいてはこの分野の理論構築へと発展させていきたい。

謝 辞

本研究にご協力いただきました妊婦の皆様に, さらにフィールドを提供していただきました施設の方々に謹んで感謝いたします。また, 貴重な助言によりご指導くださいました大阪府立看護大学町浦美智子教授に心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) Mercer, R. T.: A theoretical framework for studying factors that impact on the maternal role. *Nursing Research*, 30 (2): 73-77, 1981.
- 2) Rubin, R.: Attainment of the maternal role part I processes. *Nursing Research*, 16 (3): 237-245, 1967.
- 3) Rubin, R.: Maternal Identity and the Maternal Experience: 1984. (新道幸恵, 後藤桂子訳) ル

ヴァ・ルービン母性論 母性の主観的体験: 医学書院 45-61, 1997.

- 4) 岩田銀子, 山内葉月, 杉下知子: 妊婦の自己概念の再形成に関する一考察. *母性衛生* 38(2): 167-172, 1997.
- 5) 成田伸, 前原澄子: 母親の胎児への愛着形成に関する研究. *日本看護科学学会誌*, 13(2): 1-9, 1993.
- 6) 交野好子: 妊婦の胎児認知と想像. *母性衛生*, 38(2): 288-296, 1997.
- 7) 交野好子: 続・妊婦の胎児認知と想像 胎児の認知方法の違いから見た比較検討. *母性衛生*, 39(1): 38-42, 1998.
- 8) 石井邦子, 森恵美, 前原澄子: 妊娠期における母親役割獲得プロセスと共感性との関連について. *日本看護科学学会誌* 17(4): 37-45, 1997.
- 9) 大平光子, 前原澄子, 森恵美: 妊娠期の母親役割獲得過程を促進する看護の検討(第1報) 模倣及びロールプレイに対する看護介入. *母性衛生* 40(1): 152-159, 1999.
- 10) 有馬志津子, 伊藤美樹子, 三上洋: 育児評価としての「親性」尺度開発の試み. *日本地域看護学会誌* 4(1): 34-40, 2002.
- 11) 鮫島雅子: 父親と母親における子どもの誕生に伴う「親性」の心理的変容(1) 「親性」尺度の作成と因子構造の検討. *日本看護研究学会雑誌* 22(5): 23-35, 1999.
- 12) 氏家達夫, 高濱裕子: 3人の母親: その適応過程についての追跡的研究. *発達心理学研究* 5(2): 123-136, 1994.
- 13) 柏木恵子, 若松素子: 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. *発達心理学研究* 5(1): 72-83, 1994.
- 14) 小松良子, 片桐千鶴, 三澤寿美, 藤澤洋子: Grounded Theory Approach による母性発達課題に関する研究(第1報) 妊娠による気持ちの変化と行動の変化. *山形保健医療研究* 5: 77-86, 2002.
- 15) 山本あい子: 日本人妊婦における時間感覚, 母性課題, そして母性役割行動. *看護研究* 29(2): 94-109, 1996.
- 16) 稲垣恵子: 第1子出産・育児を支える心理的・社会的条件 効果的な支援のあり方を考える. *母性衛生* 39(1): 43-53, 1998.

- 17) 柳川真理：妊娠から産後1ヶ月の援助と二者関係 実母と義母の比較を中心に，香川医科大学看護学雑誌 7(1): 109-118, 2003.
- 18) 堀内美佐，室田千亜紀，嶋貫利香，大井けい子：家族のサポートと妊婦の母性意識の発達．母性衛生 37(2): 293-298, 1996.
- 19) 大平光子：産褥期の母親役割獲得プロセスを促進する看護援助方法に関する研究．千葉看護学会誌 6(2), 24-31, 2000.
- 2003.10.31 受稿，2004.1.30 受理

要 約

第1報では，日本人女性の妊娠期の母親役割獲得過程，特に妊娠期にあるはじめて子どもをもつ女性の気持ちと行動の変化に焦点をあて報告した。そこで，本稿では，気持ちの変化に影響を及ぼす要因が，どの時期に，どのように妊婦の気持ちに影響を及ぼしているのかについて明らかにすることを目的とした。

データは質的に収集し，8人の妊婦に継続して，妊娠初期，中期，後期，末期に半構造化面接法を用いてインタビューを行った。分析は質的帰納的に行った。

その結果，妊娠期にあるはじめて子どもをもつ女性の気持ちの変化に影響を及ぼす要因のうち，『妊娠反応がプラスになる』『妊娠が確定する』は妊娠初期に，『胎動を初覚する』は妊娠中期に，『胎動を自覚する』『妊娠経過に伴う体型の変化』は妊娠中期，後期，末期に，『妊婦健診時に超音波画像を見る』『超音波画像の写真やビデオを見る』『育児の場面を見る』『夫の言動』『実母の言動』『義母の言動』『家族以外の人の言動』『マイナートラブル』はすべての時期で，妊婦の気持ちの変化に影響を及ぼしていた。また，同じ要因であっても，作用する時期や要因の作用する気持ちの変化のパターンが違う場合があった。

妊娠期にあるはじめて子どもをもつ女性に対して，妊婦の気持ちの変化に影響を及ぼす要因がどの時期に，どのように影響しているのかを考慮しながら，個別的にアプローチする必要性が示唆された。

キーワード：妊婦，母性発達課題，気持ちの変化，影響要因